

## 審査論文の要旨

本論文は、英語における主語省略が生じる要因について、特に知覚動詞 *feel*, *look*, *sound*, *smell*, *taste* を用いた文を取り上げて、意味論的に考察するものである。特に知覚動詞 *feel* が用いられる構文の変化や、文法化による文法的・意味論的変化、知覚動詞の主語の指示性の低さに注目する。それによって主語省略が生じる要因について従来の語用論的なアプローチでは説明できなかった意味論的な要因を明らかにすることを目指したものである。

論文は2部構成をとる。第1部「英語の主語省略」(Subject Ellipsis in English)と第2部「意味論的観点からみる主語省略」(Subject Ellipsis from Semantic Perspectives)からなる。第1部を構成する第1章から第4章では語用論的な分析を行い、第2部を構成する第5章から第8章では意味論的な分析を行う。以下、各章の内容を述べる。

第1章「序章」(Introduction)では、主として、知覚動詞の主語が無生物または代名詞 *it* である文において主語省略が頻繁に観察されることを述べる。従来の記述文法や口語文法、語用論の先行研究においては一人称および二人称代名詞の主語省略が中心的に扱われており、本論文で論じる三人称の主語省略は研究が進んでいない。

第2章「省略に関する語用論的先行研究」(Previous Pragmatics Studies of Ellipsis)は、語用論の立場から行われた主語省略に関する先行研究を紹介する。先行研究では主語省略が生じる要因として、コンテキスト、可復元性、結束性、会話の文体、言葉の経済性、定型表現との共起、動詞の種類、主語の種類、文の情報量との関係などが指摘されてきた。本論ではさらに、認知的挿入句や倒置文を、主語省略が生じる際の興味深い現象と捉えて紹介している。

第3章「主語省略に関する語用論的研究」(Further Studies of Subject Ellipsis from a Pragmatic Perspective)では主語省略に関して COCA を用いて3つの事例研究を行う。3章1節では、動作動詞と状態動詞の違いを、3章2節では知覚動詞を、3章3節では会話の文体を考察する。第一の動作動詞と状態動詞の違いについての事例研究では、状態動詞を用いた文において主語省略がより多く生じており、特に特定の状態動詞(話し言葉においては *want* や *have*)において傾向が顕著であることが明らかになった。第二の知覚動詞を用いた文の主語省略を調べる事例研究では、知覚動詞を意味の上から、経験(例 *hear*〜が聞こえる)、行動(例 *listen*〜を聴く)、知覚(例 *sound*〜に聞こえる)の三種類に分類すると、3つめの知覚タイプに主語省略が多いこと、また主語が *it* のときに主語省略が多いことが明らかになった。第三の会話の文体に関する事例研究では、*it feels good (to)* および *it looks good* の文をとりあげて、その文体を5種類に分類した。それらは、凍結した文体、フォーマルな文体、相談の文体、カジュアルな文体、親密な文体の5種類で、あとに行くほどフォーマル度が低くなる。分析の結果、*it feels good (to)* および *it looks good* の *it* の省略は相談およびカジュアルな文体で多いことが明らかになった。

第4章「理論的枠組み」(Theoretical Framework)では本論の理論的枠組を、主体化と指示性を取り上げて明らかにする。主体化については Langacker (1999) の焦点の変化に依拠する。すなわち、事態を認識する主体が事態への関与を深めるにつれて、*I feel good* から *It feels good* への構文の変化をはじめとした様々な変化が *feel* に生じる。また、指示性については Payne(2011)の「実在

物に境界線があり個別化して存在する場合、その実在物には指示性がある」という定義をもとに議論を行う。

第5章 「主語省略と主体化：知覚動詞 *Feel*」 (Subject Ellipsis and Subjectification: The Perception verb *Feel*) では主語省略と主体化の関係を見るために、知覚動詞 *feel* を取り上げて3つの事例研究を行う。事例研究1ではOEDを使用し、800年代から1800年代までの*feel*の構文変化について調査したところ、主語省略が生じる文では主体化のプロセスが見られることが明らかになった。事例研究2では1800年代から2000年代までの*feel*の構文変化についてCOCAを使用して調査したところ、時代とともにSVO型からSVC型へと構文が推移していく傾向がみられた。事例研究3ではCOHAを用いて1800年代から2000年代までの*feel*を用いた文における主語省略の変化を調査したところ、*it*が主語のときに主語省略が生じやすい傾向が見られた。特に非人称の*it*の場合主語省略が起こりやすい傾向も観察された。

第6章 「主語省略と主語の指示性：知覚動詞 *Feel, Look, Sound, Smell, Taste*」 (Subject Ellipsis and the Referentiality of the Subject: Perception Verbs *Feel, Look, Sound, Smell and Taste*) では、主語の指示対象が抽象的なものであるときに主語省略が起こりやすいという仮説を立てて検証する。*feel, look, sound, smell, taste*の各動詞について出現頻度、主語省略の頻度、省略された主語は何を指しているかについて調べた。その結果、主語省略は人主語よりも物主語のときに起こりやすい傾向、特に物主語のなかでも実在物を指す場合よりも状況や出来事を表す主語が省略されやすい傾向が明らかになった。

第7章 「主語省略が起きる場合の知覚動詞の補語構造」 (Complement Structures of Verbs of Perception in Cases of Subject Ellipsis) では、主語省略と動詞の後に位置する補語の情報量の関係について論じる。先行研究の指摘とは異なり、動詞の後に位置する補語の情報量が低いから主語省略が多くなるという相関関係は見られないことを明らかにし、むしろ補語の情報量の多い場合に主語省略が多いことを明らかにした。この現象については主節と従属節の間で反転が生じており、Langacker(1999)のいう主体化の希薄化のひとつである焦点の変化によって説明可能な現象である。

第8章「結論」(Conclusion)では主語省略について、語用論的要因(主語の可復元性、先行するコンテキスト、状況的コンテキスト、首尾一貫性、会話の文体、最少努力の法則、固定表現との共起、動詞の種類、主語の種類、文の情報量、ターンテイキング)のみならず意味論的要因(主体化、主語の指示性)が関わっているという本論の結論を確認した。

また、本論の分析のなかでとりあげた知覚動詞の分類についても、従来は経験、行動、知覚の三種類に分類していたが、このなかで三番目の知覚タイプについて、経験者が主語になる *He feels good.* のようなものと、経験者が背景化され知覚対象が主語になる *It feels good.* のようなものに細分化する必要があることも明らかにした。